

壽倉雅

せんとら

【人物一覧表】

水川健太 (17) 主人公、高校二年生

水川恒吉 (77) 健太の祖父、文具店店主

水川今日子 (享年75) 健太の祖母 (遺影)

風間房子 (77) 銭湯の女将

風間唯 (17) 房子の孫、健太の同級生

滝岡昭二 (80) 茶舗店の隠居

住職

【あらすじ】

高校二年生の水川健太は、両親を交通事故で亡くしてから、商店街で文具『水川文具店』を営む祖父・恒吉（77）と祖母・今日子（75）に育てられた。健太は学校帰りに、同じ商店街にある銭湯『風乃湯』に行くのが日課で、そこで常連客である茶舗『滝岡園』の隠居・滝岡昭二（80）から、恒吉が最近『風乃湯』に足を運ばなくなっていることを聞かされる。

心筋梗塞で今日子が急死して四十九日法要を終えたある日、恒吉が店を閉めようとしていることを知った健太。思わず「継いでやってもいい」と発した健太の軽率な言葉に恒吉は激しく怒り、二人の間には溝が生まれてしまふ。その夜『風乃湯』に足を運んだ健太は、『風乃湯』の自称看板娘である同級生・風間唯（17）に相談をし、「継ぐことが目的じゃなく、どうしたいかが大事」と諭される。一方、恒吉は将棋仲間でもある昭二との身の上話の中で、若き日の自分を思い出す。集団就職で

青森から上京し、知らない土地と慣れない環境の中で、呉服店の奉公人だった頃のことを考えると、健太も同じように自分のことで精一杯なのかもしれないと感じていた。

『風乃湯』の女将で、唯の祖母である房子（77）からの誘いを受けて、恒吉が『風乃湯』にようやく足を運んだのは、それから間もなくのことだった。既に男湯に入っていた健太は、『風乃湯』が癒しの場所であり、当時住み込みの従業員をしていた今日子との出会いの場所でもあったこと、そして今日子のことを思い出すことが辛く『風乃湯』に行けなかったことを恒吉からの告白で知る。

思い出の場所ならばこれからも通うべきと言う健太は、改めて「文具店を継がせてください」と恒吉に告げた。「まずは掃除だ」と、奉公先で最初に学んだことを恒吉は伝え、健太と恒吉の二人は、湯気の立つ中で握手を交わしたのだった。

○商店街（夕）

昔ながらの古い建物が何軒も並んでい
る。

○銭湯『風乃湯』・表

古い木造建築で、『風乃湯』の暖簾が掲
げられている。

学校帰りの高校二年生・水川健太（17）
が、自転車でやってくる。

○同・ロビー

健太が入ってくる——受付で店番をし
ている女将・風間房子（77）。

房子「いらっしやいませ。（と健太に気づき）
あらケン坊、いらっしやい」

健太「こんにちは。（と財布から五百円玉を出
して）はい、五百円ちょうど」

房子「確かに。ゆっくりしていきな」

健太「はい」

○同・男湯

湯船に浸かる健太。

健太「ふうー」

と、隣で入浴していた老人・滝岡昭二

(80)が、

昭二「あれ、ケン坊じゃねえか」

健太「滝岡のご隠居。珍しいですね、こんなに早く。いつもはうちのじいちさんと一緒に夜に来てるのに」

昭二「お前何も気づかねえのか」

健太「え？」

昭二「ツネちゃんときたら、最近俺が誘ってもちっとも来ねえんだよ。将棋の腕も大分落ちた見てえだしな」

健太「そうですか……」

昭二「やっぱり、今日子ちゃんが亡くなったことが応えてるんだろうな」

健太「……」

○同・ロビー

健太が帰り支度をして出てくる。

健太「おばあちゃん、今日も良い湯だったよ」

と、受付から房子の孫娘・唯（17）が顔を
を出すと、

唯「誰がおばあちゃんだって」

健太「うわッ……びっくりした、いつチェン
ジしたんだよ」

唯「おばあちゃんは夕飯食べるから母屋に戻
ったの。だからその間は、『風乃湯』の看板
娘、風間唯が受付担当です」

健太「何が看板娘だよ。お前最近クラスでも、
そのフリーズ使ってるよな。ここの宣伝で
もしてるつもりか？」

唯「当たり前じゃん。この商店街は、人の繋
がりで成り立ってるようなもんなんだよ。
シャッター街になるのも時間の問題って言
われてる今だからこそ、ちゃんと宣伝して、
人に来てもらわないと」

健太「ふーん」

唯「そんなことより、おばあちゃんや滝岡の

ご隠居から聞いたけど、最近健太のおじいちゃん、全然うちに来てないみたいじゃん」

健太「そうらしいな」

唯「何でそんな他人事なわけ？」

健太「別にじいちゃんがどこで風呂入ろうが勝手だろ。そんな気にするほどのことでもないだろ」

呆れ顔の唯。

○文具『水川文具店』・店内（夜）

商店街の一角——手前が店舗、奥が母屋の造り。

筆記具やノート、ファイル等、様々な種類の文具が陳列されている。

健太の祖父・恒吉（77）が、帳簿をつけている——健太が帰宅する。

健太「ただいま」

恒吉「遅かったじゃねえか」

健太「学校帰りに『風乃湯』行ってたから」

恒吉「……そうか」

健太「最近、全然行ってないんだって？ 今

日滝岡のご隠居に言われた」

恒吉「（答えず）……健太、シャッター閉めてくれ」

健太「はいはい」

と、シャッターを閉める。

○同・母屋・居間

健太と常吉が夕飯を食べている。

恒吉「来週の土曜、空けとけよ。ばあさんの

四十九日の法要だからな」

健太「分かった。誰か呼ぶの？」

恒吉「まあ、ばあさんと仲が良かった人だけで良いだろ。ほとんど身内だけでやれば良

いだけだし、あまり多く来られても、こっ

ちが余計な氣い遣うだけだからな」

健太「そうだね」

恒吉、憂うように祭壇を見つめる――

祭壇に置かれている常吉の亡き妻・今

日子（享年75）の遺影と骨壺。

○同・全景（翌週の土曜日）

○同・店内

住職が出てきて、恒吉が見送りをする。

住職「それでは、私はこれで」

恒吉「ありがとうございます」

○同・母屋・居間

健太、房子、昭二が談笑していると、

恒吉が戻ってくる。

恒吉「いやあ、今日子のためにわざわざ来てくれてありがとう。あいつも喜んでるよ」

房子「もう四十九日なんて、あつという間ね。」

何より今日子ちゃんが一番感じてるか」

昭二「突然だったもんな。心筋梗塞でぽっくりと」

健太「病気なんてしたことなかったんで、正直俺も、まだ信じられないような感覚なんですけど」

恒吉「今日子が亡くなっただろ。もうしばらくしたら、店閉めようと思ってるんだ」

健太「じいちゃん……」

房子「ツネちゃん本気なの？ ケン坊だっているし、私たち商店街の人間は、ここで文房具買い揃えられるのに」

恒吉「(健太を見て)こいつには継げねえだろ。ろくに店の手伝いもしたことないんだから。フサちゃんのとこはさ、息子夫婦や孫の唯ちゃんがちゃんと継いでくれるから何の心配もないだろうけど」

房子「(苦笑して)息子はアテになんないわよ。まあその分、うちは嫁が人一倍働いてくれるから助かってるんだけどね」

恒吉「娘夫婦が交通事故で亡くなってから、俺か今日子、どちらかが死ぬまでは店やろうって話してたんだよ。だから、そろそろ時が来たんじゃないかねえかと思ってるさ」

健太「……」

昭二「ツネちゃんの中では、もう決めたこと

なんだな」

恒吉「ああ。何なら、いつ閉めたって悔いは残らねえよ」

険しい顔でお互いを見合う房子と昭二
——一人慥然としている健太。

○銭湯『風乃湯』・ロビー

房子が帰宅する——店番をしている唯。

房子「ただいま」

唯「おかえり、早かったんだね」

房子「まあ、法要終わって、少しおしゃべりするぐらいだったからね。すぐ着替えてくるわ」

唯「良いよ。今お客さん落ち着いてる頃だから、おばあちゃんもゆっくりしなよ。ここは私がやっつくからさ」

房子「そう？　じゃあお言葉に甘えて、少しゆっくりしてから戻ってくるわ」

○文具『水川文具店』・母屋・居間（夜）

健太が夕飯の支度をしている——恒吉が入ってくると、

恒吉「なあ、風呂沸いてるか？」

健太「ああ、さっき沸いたところ」

恒吉「そっか」

と、出ていこうとする——健太、夕飯の支度の手を止めると呼び止めて、

健太「じいちゃん」

恒吉「何だ？」

健太「昼に話してたこと、本当？」

恒吉「ああ」

健太「急にあんなこと言い出すなんて思わなかったからさ。けど、せっかく店あるんだから、何も閉めなくても良いだろ。いざって時はさ、俺が継いでやっても良いし」

恒吉「(ムツとして)継いでやっても良いだ？」

健太「……」

恒吉「店のこともロクに知らない奴が、一人前の口叩くなッ……」

健太「……」

恒吉「店を継ぐってことはな、お前が考えるほど甘いもんじゃねえんだよ。気安くそんな言葉口に出すな」

と、憤然と去っていく——返す言葉もなく黙って立ち尽くしている健太。

○銭湯『風乃湯』・全景（夜）

○同・ロビー

風呂上がり健太が瓶牛乳を飲んでる——受付で仕事をしている唯。

唯「そりゃ怒るよ、おじいちゃんだって」

健太「けど、あんなにキレるとは思わなかったらさ」

唯「おじいちゃんのためを思って言ったんだろけど、そんなのおじいちゃんからしたら、嬉しくも何ともないんだから」

健太「どうして？」

唯『『水川文具店』を本当に継ぐ覚悟があるのかも分からないし、そもそもおじいちゃん

のために店を継ぐってことがおかしいと思
うしさ」

健太「そうかな？」

唯「だって、おじいちゃんのために店を残す
ことを目的にしちゃったら、店を継ぐこと
がゴールになっちゃうじゃん。一番大事な
のはその後、継いでから店をどうしたいか
ってことでしょ。店を継いで、はいおしま
いってなったら、間違いなく店は潰れちゃ
うよ。そんなこと、おじいちゃん望んでな
いと思う」

健太「……」

唯「まあ、そう落ち込まないの。健太らしく
ないよ」

健太「ありがと、話聞いてくれて。じゃ、俺
帰るわ」

唯「瓶もらうわ」

健太「(瓶を渡して) じゃ、お休み」

唯「また月曜日学校でね」

出ていく健太。

○茶舗『滝岡園』・店内（数日後）

恒吉と昭二が将棋を指している。

昭二「ほお、親子喧嘩ならぬ爺孫喧嘩か」

恒吉「まあな」

昭二「若いもんはさ、自分のことで精一杯な
んだろ。まだ継ぐかどうかも決めてないか
ら、とりあえずツネちゃんのことを思って
それらしいことを言ってくれたんじゃねえ
のかケン坊は」

恒吉「どうだろうな」

昭二「ツネちゃんが、今のケン坊と同じぐら
いの時、何してた？」

恒吉「十七か…：確か、集団就職で青森から
上京して一年経って、ようやく環境に慣れ
た頃だったかな」

昭二「ほら、ツネちゃんだってそんな感じだ
ろ。自分で店をやるとか、そういう考えに
はなってなかったじゃないか。それにあの
時ツネちゃんは、まだ呉服店の丁稚奉公み

「たいなもんだっただろ」

恒吉「まあな……」

昭二「どうだい。気分転換に、今日辺り『風乃湯』でも行くか？」

恒吉「いや、やめとくよ」

昭二「そっか。まあ気が変わったら、また声かけてくれ。俺はこの通り、暇を持て余したお茶屋の隠居だからよ」

黙ったままの恒吉。

○銭湯『風乃湯』・男湯

湯船に浸かっている健太——考え事を
するように天井を見上げる。

○文具『水川文具店』・店内

恒吉が商品を並べている——そこへ、
房子が来店してくる。

房子「ツネちゃん」

恒吉「やあ、いらっしやい」

房子、鉛筆数本と消しゴムを手にする

と、レジの前に置く。

恒吉「はい、どうも」

房子「最近全然うち来ないけど、どうしたの？」

恒吉「別に、理由なんてないさ（とレジ打ちを始める）」

房子「今日子ちゃんのこと、思い出しちゃうから？」

レジ打ちする恒吉の手が止まる。

房子「やっぱりね。それならそうって言えば良いのに。何も隠すことじゃないんだから」

恒吉「……」

房子「昭二さんも気にしてたわよ」

恒吉、レジ打ちを再開すると、

恒吉「五百六十円ね」

房子「ツネちゃん……（と財布から小銭を出す）」

恒吉「（数えて）はい確かに。まいどあり」

と、レジのボタンを押して、印字されたレシートを房子に渡す。

房子「ケン坊とおいでよ。私、待ってるから」

と、出ていく——険しい顔で見送る恒吉。

○銭湯『風乃湯』・表（夕）

学校帰りの健太が、自転車に乗ってやってくる。

○同・ロビー

受付をしている房子と手伝っている唯——そこへ、健太が入ってくる。

房子「いらっしやい」

健太「こんにちは」

唯「お、今日も来たね」

健太「来ちゃ悪いかよ」

唯「別にそんなこと言ってないじゃん」

健太「学校終わってすぐ店に出るなんて、やっぱりお前はすげえよ」

唯「え？」

健太「（財布から五百円玉を出して）はい、五百円ちょうど。じゃ」

と、男湯へ入っていく。

唯「あいつ、何かあったのかな」

房子「何かあって？」

唯「いや、何でもない」

と、ドアが開き、客が入ってくる。

房子・唯「いらっしやいませ。（と客を見て）

え……」

○同・男湯

健太が目を閉じたまま、じっと湯船に
浸かっている――と、恒吉の音がする。

恒吉「健太」

健太が目を開けると、隣で恒吉が入浴
している。

健太「じいちゃん……」

恒吉「気分が変わったから、風呂入りに来た」

健太「気分って」

恒吉「なあ、覚えてるか。俺が初めて、この

商店街に来た時の話をしたこと」

健太「青森から集団就職で上京して、呉服店

で奉公してたんだろ」

恒吉「ああ。実家を離れて、知り合いもない、
どんなところかも分からない土地で、頼れ
る人もいなくて、毎日不安だった」

健太「今と違ってネットもないから、画像検
索とかで自分の行く場所が見れるわけじゃ
ないもんな」

○同・ロビー

房子と唯が話している。

房子「当時ツネちゃんね、御用聞きってい
う、まあ店のお使いや配達をするようなこ
とをしてたのよ。住み込みの奉公だったか
ら、いろいろ気疲れすることもあったんだ
ろうけど、それでも週に一度、ここにお風
呂に入って、牛乳を飲み干したら、晴々と
した顔で帰ってたの」

唯「健太のおじいちゃん、そんな昔からの常
連客だったんだ」

○同・男湯

健太と恒吉が話している。

恒吉「ここに来ると、疲れが全部吹き飛んだんだよ。癒しの場所ってやつだったんだ」

健太「風呂が良いから？」

恒吉「それもあるな」

健太「それも？」

恒吉「当時ここにはな、俺と似たように、集団就職で福岡から上京して、住み込みで働いてた従業員がいたんだ。その人は……」

○同・ロビー

房子と唯が話している。

房子「沢井今日子」

唯「今日子って、まさか……」

房子「亡くなったケン坊のおばあちゃんよ」

唯「まさか、この出会いがきっかけ？」

房子「そう。何年かお付き合いしてから結婚して、しばらく経ってからお互いに店を辞めて、空き物件になってたところで文房具

店を始めたの」

唯「へえ」

と、昭二が来店してくる。

昭二「よッ」

房子「いらっしやい。ツネちゃん来てるわよ」

昭二「あいつ、ようやく来る気になったか」

○同・男湯

健太と恒吉が話している。

健太「ここに来れなかったのは、ばあちゃんのことを思い出しちやうからだったんだ」

恒吉「まあ、そんなとこだ。ここに来ると、

あの頃の記憶が蘇ってな」

健太「ばあちゃんとの思い出は、ずっと忘れないようにしなきゃね。だったら尚更、ここに通わないと。今となっては数少ない、じいちゃんとはあちゃんの思い出の場所なんだから」

恒吉「そうだな」

健太「(改まって)なあ、じいちゃん」

恒吉「どうした？」

健太「『水川文具店』を継がせてください」

恒吉「……」

健太「店の手伝いもこれからする。少しずつ、

店を継ぐための勉強もするから」

恒吉「……」

健太「お願いします」

恒吉「……じゃあ、まずは掃除だな」

健太「え……？」

恒吉「清潔感のない店に、客は来ない。店の隅から隅まで、まずはしっかりと掃除をする。そこから始める。俺もばあさんも、奉公先でそれを最初に学んだんだ」

健太「うん、分かった」

のびのびとしながら笑い合う健太と恒吉、お互いに握手を交わす——その手からは、白い湯気が立っている。

了